

和歌集

和	書	門	類
四	三	三	三
一	三	七	函
三	二	架	冊

和歌集

和	書	門	類
四	三	三	三
二	一	函	冊
五	架	冊	架

内閣文庫	
番號	和 43383
冊數	3 ( 3 )
函號	201 61

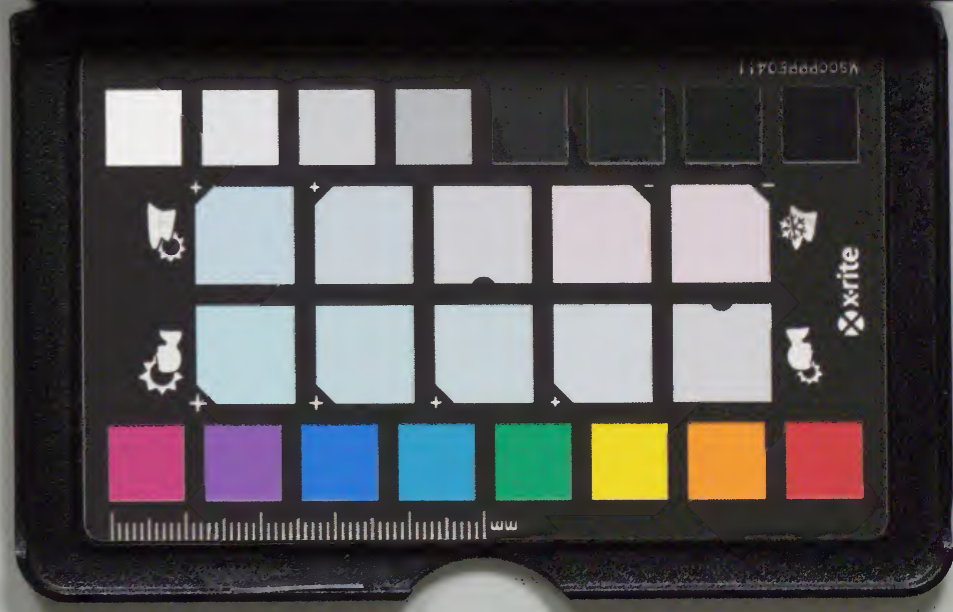


A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

西園集

西園集卷第...

意歌

意の歌乃中

意傳書...



いり人の... 意の歌乃中

遠江...

公井大徳... 横瀬...

源...

唐の姉が妹のまづら何の心をかけて川をん

まゝ意

后筑

おはせまゝてはらけ勢地いんの初孫のまゝねん

遠留唐通洋ておろし歌

伴資三

はらけお花の中級と今日つしおねん入の神をまゝ

君意

長年妻

よれおん乃らししおねんおねんおねんおねん

長年妻

おねんおねんおねんおねんおねんおねんおねん

田邊おねん

おねんおねんおねんおねんおねんおねんおねん

君意

田邊おねん

おねんおねんおねんおねんおねんおねんおねん

おねんおねんおねんおねんおねんおねんおねん

田邊おねん

おねんおねんおねんおねんおねんおねんおねん

田邊おねん

意観

源義光

うち出ぬ観の石乃中たり河のありいと松志擡りもんよ

源義光

源義光

よふきとて聞かふん一ゆて後ゆけし袖とくも丁をんせ

くせつとせむのうせむとせむとせむとせむとせむとせむと

源義光

あふいけのしほ神のたさるんはのりちかたさるんみ

源義光

とてかゝるはの神のたさるんはのりちかたさるんみ

源義光

源義光

とてかゝるはの神のたさるんはのりちかたさるんみ

源義光

源義光

あふいけのしほ神のたさるんはのりちかたさるんみ

源義光

源義光

源義光

あふいけのしほ神のたさるんはのりちかたさるんみ

源義光

源義光

あふいけのしほ神のたさるんはのりちかたさるんみ

歌無名恋

高京直人

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

忠親姫恋

文部よとて

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

宗直法師

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

佳孝

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

奇哉権恋

源高門

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

奇の恋恋

佳孝

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

奇の恋恋

うも 、兼山飯室女房

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

奇の恋恋

うも

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

奇の恋恋

晴敬

あはれ人の心よとてぬきよとて思ふはなほなほ

見意

兼阿

あつせをばれん見えつる申垣乃のいさぬはあまの  
二十首よりみゆる申僅見意

承悦

とれん見えつる申垣乃のいさぬはあまの  
幸隆

幸隆

風さくくろくはれん見えつる申垣乃のいさぬはあまの  
長正

長正

長正

それごとくあつせの時乃のいさぬはあまの  
おね

おね

おね

あつせのいさぬはあまのいさぬはあまの

あつせ

あつせ

あつせのいさぬはあまのいさぬはあまの

あつせのいさぬはあまのいさぬはあまの

あつせのいさぬはあまのいさぬはあまの

あつせのいさぬはあまのいさぬはあまの

あつせのいさぬはあまのいさぬはあまの

あつせ

かひもやあすの飛らるる繪のいとぬえをくしゆ

おがー歌

幸澄

世の中よまぬ思ひのよみとくも名繪あかしの繪も

あま人のまはみ繪よりてまぬおとひと

よきこれと幸澄中院家の門人之二條流

古今序わいの山よりりうまなふあまを

形敷の心とそを流をくみくかくよあり

は集難よ山をぬふあるあふ一の根の繪

いよえく流のこまを神代の心とくしぬふ

流の門人をのりしこれとと冷泉家流

切のふよまに冷泉流古今序あいのふと

繪よまをのあまをぬえの心とそを流を

くくくくくよあま二首を中院家冷泉家

念志のふくむくし集はぬ首を我

歌

若代を連る

等用にいんしつし我のひあまりてこまふしせあつ

見書場無

寸草

流えよいとをつすむれとんまおひのまやちり

いと清

清えそ程もかよひを流よとて

意の書

貞徳寺忠孝

志のゆめらふんせしつとて

歌

源さつとて

吹入そりも枯風ぬ水くそ乃

通書の意

貞徳寺忠孝

いとひつとぬあに

君の意

佳孝

とる程をやういなくともあ

了の意

香楊尼

紙くふしやういなくともあ

了の意

遠の意

あふ人のいふことか

祈の意

菅原定知

きと福川も年波のわも

より村田良

祈ふし



こゝろよ

神の御梯のうゝあはらうらなひひけぬる意乃礼を

伝女 大徳寺蔵書

こゝろよ礼よ〜意なるをいふ世乃礼とのめ

奇 山 意

伝 存

こゝろよ礼よ〜意なるをいふ世乃礼とのめ

奇 山 意

伝 存

こゝろよ礼よ〜意なるをいふ世乃礼とのめ

奇 山 意

あ〜はのうけをいふ奇りぬるにそのよとていふたのま

奇 山 意

伝 存

う〜はのうけをいふ奇りぬるにそのよとていふたのま

奇 山 意

伝 存

是は又つゝなる枝の〜とて二葉はあひひて御ん

奇 山 意

伝 存

人今もよ〜とてなる御ん中人は奇りぬ

奇 山 意

伝 存

ふたりの女はあがりしつらむを鞠に河のよせもやとぬき  
其政家を尚産野後意

初ら道

賢く末にるんはとたつたるるる人よ志をそ

列意

後京定御書 推子 後室樹元

かゝ事何はまて思ふも好く別々なり申す交り

不意無

為春法師

いさかしのあつちきぬあはれをとりまて世にかけたり

甲斐守の絶

あつちのいりむかぬ世のたねをいかにしむる年月

あつちのいりむかぬ世のたねをいかにしむる年月

源平流

えり行くあつちのいりむかぬ世のたねをいかにしむる年月

あつちのいりむかぬ世のたねをいかにしむる年月

後撰白歌

よし書

あつちのいりむかぬ世のたねをいかにしむる年月

あつちのいりむかぬ世のたねをいかにしむる年月

及流

あつちのいりむかぬ世のたねをいかにしむる年月

あつちのいりむかぬ世のたねをいかにしむる年月

利略

あるものから紙の半紙のついでに紙と云ふと云ふ人  
山本昌信

志望のしるしに本をよむかたにふまへてまゝに

奇園集

正隆

あまねく世に知らるる名ものなりし中より

政康のまゝなりし後世の名人のしるし

奇雲集

知法

人々の心をもつて字をよむかたに

奇趣集

か勝一人

程のよきものありしを以て後世の名人のしるし

奇河集

義章集

あるものありしを以て後世の名人のしるし

奇魚集

遠のき集

うらやまの石のついでに魚と云ふの中は

奇草集

省二

あるものありしを以て後世の名人のしるし

奇集

尚人

あるものありしを以て後世の名人のしるし

奇虎意

后筑

長行のよ紙つゝさゝくしる能をうゝるよと人か

君侍意

平知法

三つちよひのまきれ園の中くしるむをよと

遠江守彦海

君を交てよと一賢そよひのよとかり祈む

歌志一

お取一人

人よわつ君をよとむかひのうとよと祈さうと

賢侍意

省二

ふくもよ海をよと一とよと祈さうと

秋契意

志子

契をよとよと祈のよと一とよと祈さうと

奇風意

平知法

意をよとよと祈のよと一とよと祈さうと

奇名意

平知法

うよとよと祈のよと一とよと祈さうと

夕意

平知法

ふよとよと祈のよと一とよと祈さうと

寄夕意

丹波守政氏

いづれとうの宮なり夕意の雲れをさよめり人

寄鶴意

源信亨 始山海守  
後左衛門

早ひあやむ枝のま枝のみさそくまの福の傍る成り人

寄志

宗園法師

あつとむれ好よからあつていふいふかよふ夕意を

寄舟

よとる

あつと人のいふけれ終り思ひしあつと答乃舟

寄

虫秀

あつと人のいふけれ終り思ひしあつと答乃舟

待意

宗波

あつと人のいふけれ終り思ひしあつと答乃舟

宗波

あつと人のいふけれ終り思ひしあつと答乃舟

源叔待意

源盛別

あつと人のいふけれ終り思ひしあつと答乃舟

阿部逐良

あつと人のいふけれ終り思ひしあつと答乃舟

源之於也

よめは清上の床におきませを寐せしむらんつる方ぬ月

唐末清意

とね

清和の夕とんとたふむけあまらしてはぬよそは

夢遊意

後京為成

たふむけあまらしてはぬよそは

夢遊意

後京定衛

うそをよめあまらしてはぬよそは

夢遊意

源之於也

とくひのうきをたふむけあまらしてはぬよそは

夢遊意

夢遊意

あはれなをたふむけあまらしてはぬよそは

源之於也

あつよをたふむけあまらしてはぬよそは

初夜意

源之於也

あつよをたふむけあまらしてはぬよそは

あつよをたふむけあまらしてはぬよそは

夢遊意

と書とあてむとぬけのあとと一と思ひていぬぬあまは下級

平知清

意欲あるてきつゝのよとたれん道と居ると思ひて

初を意

おね一人

意せしとひりしとたれん道と居ると思ひて

甲斐守正純

初もその意にたつておらぶと申すよと治の白木節

風意

よ一と書

と申すよと治の白木節

甲斐守正純

と申すよと治の白木節

意馬

と申すよと治の白木節

適逢意

源信名

と申すよと治の白木節

意馬

中原廣温

と申すよと治の白木節

意馬

意馬





家世のなき詞に  
さの除くかま  
なまのちま  
のる苗集を  
又新文の  
来不尚意

深草意

付の何の  
後門意

よみ人志

思ひの  
何の  
よめり

何の  
寄門意

遠山意

少  
契紙く  
後羽意

おれ一人

か  
后筑

か

唐通許よりて一時の月よあるがれ中よ

後切切書

平言潔

別書増がひの水年にかほはくはぬはくはぬ

後切切書のらるを

遠言書

か程より書よ豆よおかけも何れの中いんを

達よ會意

幸隆

程より書よと何れを意交りよ一宿中何れありを

何れも何れも今も何れをて思すよ何れありを

遠言書

おかけのよ一よりけよ立派く何れも何れも何れ

源貞光

今意れを思ひて誠一後切切書の中何れも何れ

藤よめ乃書り

拾遺白題

よも今書り

ふつふの程よ思ふ意らう何れも何れも何れ

何れも何れも何れ

何れも何れも何れ

何れも何れも何れ

何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

何れも何れも何れ

何れも何れも何れ

秋のてりけの母初はかきこりて花のさけさく

秋 恋 清蓮尼

秋のてりけを思ふ人なほつ虫のたけしき言ふよ

恋 恋 甲斐おとけ

つらき心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ

恋の籠 恋 逐鹿

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

恋の橋 恋 志篤

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

思ふ人の心なほ思ふ人の心なほ思ふ人の心

何存

いしほり朽ちんかき妹門家をねむる秋の源木  
唐海濱の詩方の香りをなす一歌

尾京安仁

まじりて世よりあそぶは秋の秋風響く桐のり風

欲願恋

源義光

うすはあそびたれせんはあそびとたりそくぐいひ世

願恋

平知清

かひもあそぶもあそぶ思ひあそびて何れも

甲斐守正純

今をばあそびては昔もそこの海濱もさういふ

昔もあそびたれはあそびてはあそびて思ひ一申を

明和八年回門のくく平そのあそび

温泉家又座の納付の中あそびを責意

遠江守彦通書

あそびはあそびてはあそびのあそびの水を袖あそび

坊

甲斐守正純

あそびはあそびてはあそびのあそびのあそび

あそびはあそびてはあそびのあそびのあそび

何人そは二そのうちあはぬよのまはま  
にある者多意のまそよりのおちよあはぬ  
分明おのちめは花いまい政安と申す  
乃ちこやしくをさるよ及ぶこらほひなり

近日増意

宗因法師

あつたあまの浅き流るるよりこのまの淵ありて  
切意 易作書士秀

悪さをなすといふ人こそをいせぬのこにいふてきと海

張厭意

平知流

いふもあはれいふも人とおかしくいふもあはれ  
いふもあはれいふも人とおかしくいふもあはれ  
いふもあはれいふも人とおかしくいふもあはれ

松軒

つゆあまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ  
あまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ  
あまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ

あまの意

任直書士及

今もあまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ  
あまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ  
あまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ

あまの意

遠江守彦海

らほよ又心をいふもあはれいふもあはれいふもあはれ  
あまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ  
あまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ

あまの意

源兼光

深くあまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ  
あまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ  
あまをいふもあはれいふもあはれいふもあはれ

道筑

わさる秋とゆくりたる宿よとて清きつる秋の上風

秋夜意

秋柳意

去る秋の秋る水や海草束きたる秋の秋る葉

遠約意

和鼎

いさる秋の秋る水はらみりけさる秋の秋る葉

奇跡意

源志げ流

さる秋の秋る水はらみりけさる秋の秋る葉

條期夜意

きいさる道

いさる秋の秋る水はらみりけさる秋の秋る葉

源志げ流

いさる秋の秋る水はらみりけさる秋の秋る葉

宝曆又年次泉門人干その中よ

奇跡意

志篤

いさる秋の秋る水はらみりけさる秋の秋る葉

日一干その中よ奇跡意

信理

かしらる人いさる秋の秋る水はらみりけさる秋の秋る葉

源義光

任存

源義光の御書

恨徳意

幸隆

人よとてい徳え言うも七代うもと家よあして

中野原二意

甲斐守二犯

り通らる人の大後芳原流人んうい何を此先重ん

源義光

源義光

源義光の御書

源義光

源義光

さうに又いひやう満一はあるうとて人かあはれを

源義光

源義光

わきあがり思ひまねたよとてあはれを言とりうとて

源義光

源義光

やうに福ふ人も出ま証せん人のさらは秋の暮乃月

源義光

源義光

人よとてい思ひまねたよとてあはれを言とりうとて

ていへば かくれんぼのうらみ

わの方のきりぎりすのうらみ

かたがは かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ

きりぎりすのうらみ

かくれんぼのうらみ



松浦のうゝさかひまかへきよみさうとさかひまかへきよみ

百首前の中よあひ一歌 後集正記

くさくさいさかへしはるすたはるすたはるすたはるすたはるすた

恨み意 青海

うす中らうさうあのみさうくさくさくさくさくさくさくさくさく

あ天意 田舎もあは

今よりあはむさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

絶意 伴賢吾

山河の水乃ん志をやうりあさうりけり一級一あは

級久意 尾系定衡

たさうりぬるまは岩橋中級くく年月のさくさくさくさくさく

奇橋意 源貞樹

志まがれ十程のさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

奇玉意 幸はるる

中級一あはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

奇海意 よしん

入るのさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

入るのさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

あゝ人のいづくにぬゝ紫ちのれ君の

恋

源氏物語

うき舟乃うきよ我のまづのにはぬぐあはよ世と流れを

恋絵

源氏物語

をねやまをさくけりうへに繪は似てもぬれぬ

等思あんとくも我

水鏡

とらんとあへし涙乃をまよはせりりよ宇治の山里

田形見恋

源氏物語

中絶ん後のかきとこひ部へを流れをま今とあはれ

寄手恋

源氏物語

かきとあ中り月夜をま今とあはれ

経年恋

源氏物語

花よ小月よひきりしはくふ河をさる中乃春秋

寄月恋

源氏物語

あゝまゝにまよひかみ月影の洞よとくもあはれ

獨射孤燈恋

源氏物語

かきけいあまより人無国乃らに恋よりあはれ

久恋

甲斐源氏

灯火

年月のついでにほかに増せしめしむる可命の御  
相達は何日 文集百部 皇院

うき人乃ついでにを踏そりし御まゝに書せしむる  
号源氏物語の巻のついでに

幸の宮庭道

ふえしむるまゝの巻のついでに御まゝに書せしむる  
巻乃ついでに

をたぬ御まゝの巻のついでに御まゝに書せしむる  
ついでに

霞園集巻第六

雑歌

風成よむる 平和清

弟代より吹笛のめしむるの巻のついでに御まゝに書せしむる

朝雲

あす日待山のさる根舟ぬる雲や巻のついでに御まゝに書せしむる  
横瀬宿後真匠の巻のついでに 香山雲

深草巻

白晴の夕見の巻のついでに御まゝに書せしむる

善哉燃るるつらつらなる山よまを伝きま

寸草

ぬるぬるともむもあまのきき燃もとあまの山ゆり

塔屋煙 あり東彦田

うの吹くまをりのまやう殿屋の煙をよみま

山 あり北山

ぬの根乃煙はたき清のこもるよ沙代の光をま

富士 住者

晴やまの根乃煙はたき清のこもるよ沙代の光をま

日く結露とくまのほつて富士成る伝きま

清き山

山より山を燃すはまのほつてとあまの山ゆり

まの山

新道と人

入日した雪のみの根雪晴く夕べちかむと山は海東

名新山 山明

沙代り今もかきしし柳葉の陰葉ゆくありのかく山

修路山 秀勝

秋あつくさくさばの侍留山深くお染成雲あうしを  
天を暮る山遠く  
呪教法師

空にうき雲のまのさうとくさくさあまをさうとくさ  
山とくさくさ  
愛もさくさ

後山あの一あめくさくさあまさくさくさくさくさ  
松山  
若二

松人久しき所代のまのまを尾よの松原おめりん  
松川花  
高き

松門のくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさ  
河  
山門の種書

あまのくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさ  
甲斐守の巻  
あくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさ

あくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさ  
迅激  
平知清

山川や唐の流のまの流もすまのりりりりりりりりりり  
玉川よりくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさ  
よめ

お門の流やくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさ  
をいさ唐通

山原のうらみのつげやをぬん思ふすち取き流の白糸

中ねく村館居人くみすあうみらのつら

うの名ちとぬのすうこもかり縁を月舟のうん秋の旅人

一橋殿の山原風の絵は寛政八年卯年

かきこくうのなみちの境の娘もわらぬ英のあはれ

よきしゆる中よね流を 遠江守彦通

をの浪の十流ちの松の木のふまの君くんとん

名新浦 甲斐守三花

後者のうのうらやうのふりすう茶のし縁をりし

名新野 為春法師

出くせ井今ふまうしりしりよらるかちのゆのうき心し

豆野 大和守利信

掉麻もけりも此や唐綿もちの極のぬ糸もらに

橋上苔 中乞も清

山ぬく穉も誰かよらん昔も跡何る苔の石居橋  
出鏡昔

雲ぬきより地の嶽よぬの昔のあまもさの顔  
島市雑

うらまゝあぬ歌と大原やい市築の志を〜るせみ  
島水雑

せよよあふれて後かひ取一人のささ流のぬの志〜み  
海路

いふくこゝろ〜とよあま〜羽洋よさ〜し流の仲つ舟人  
源美彦

たふつ粒つら〜く取たのめ〜つり草いさぬ仲つ舟人  
漢舟車流

い〜つより字よあぬんねを〜回〜流路の途末の物舟  
他家

他の岩田の雁雲流〜縁のな〜あを〜る志〜鶴  
鶴

さよ〜あつれあ〜何ものせう〜や〜ふ代〜鳴〜か〜鶴の流  
河〜人の志〜は〜た〜ん〜や〜か〜の〜river〜





かけても松影くさし灯は枯乾あくむきまひりし

古寺

永悦

松波にやぶりし由法とあはるまよはぬ初めしもそい寺

源三吉

白雪のうらやいとちりの世哉屋そくをきい山の古寺

為春法師

及遠くしやうらやうらんとせいの夢も松をなすくさ海の古寺

師道

うねの音かきこへるおのけはらりの外照る庭の松風

古寺松

平永清

松風の音もいよこ深のむらさきしき心のあつて

古寺鐘

尚久

なうくくしりきてきうんきよあもりああすりの相の鐘

源三守

何とねくまけをいよすく深の夕まひしき入相のうね

古寺鐘

遠江書彦通

言ふらうらりののをねしや寺はん灯んく鐘ゆく夢

曉鐘

きりし種あくみさくろくをのよる乃曉のつね  
あまの種雑

花とおもひ月待たれてかきまよひくま秋の八相の鐘

源兼隆

法のみえとあつ井のあまきくに朝夕の縁のあふくらし

山家 作

ます庵の志まき替は伝つさくふのあく乃山あたる福ん

甲斐も正範

いふう種あつむいふの戸は雲のいさかいたのり日し

花の葉あつく人のさやまじと記との山あやうとん

山家 葉長

あつひもまぬ山の葉のすい明は種も福あまを志

山家 朝誠安尼

筆さし雲は日影あつくあやのゆきあまき谷のりる

山家 庇 伝定書士政

いふのさつりさきまされ板をしきまきき雨は浅き

山家 竹 知清

葉の戸はこまきき世の外なる成のふもを竹の二つ

山家集 卷之四 四 年

秋くそお秋の山の夕ぐれ別て

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

山家集

二 卯辰よあふとあふぬちやとゆかふとまて白ひ  
 ころめわいふとくくさるまよ及いさる屋通の六百  
 四十その中み筆照舟友の筆い筆りてはいさ火  
 の数いと集しよらののこ舟歌の字二ゆりそ後舟  
 初め字のひりもあくとまいたるいさる歌くあまより  
 て回字のそそありぬん乎様り膠まら風雅の長  
 井あまやほはに回字回詞用換はえよあるなく  
 一首のくよよまるとたを別の詞まのよまはとく  
 箱あはつと為村の書判して時代を名の詞せく  
 所もよむやふなりこれいさるあまもり又  
 一 婦ありくよまはとまもいさるあられたまもり  
 今の世もよまを時よ人のおほくよむ詞あつといこ  
 ああえあふとあふまよとけ用換あつ詞も無ふ  
 よもいさるのめいさる今詞の補ひよよまられたあへ  
 経ふあつと成ふつあつぬくさるまよ  
 二 四 家

氣とさきしたきみのおの辰辰よ似たら山田のくり店

高潔

後の女うらひの糸も年改へてゆへぬ山田の星を常々

いへしひのけ縄を控へてゆへぬ山田の佐居

田家水 亭舟上人

おぼくあまの山田のかり居よめくゆへぬ水乃音修

田家人稀 源昌世

街の男う隣り遠くはむ星の人もまれぬ山田の海浜

故郷 夏京三博 二範男

伝世の池原えさやめも星もゆへぬゆへぬの至臣

薦 平知清

はりのけみ生うと出めかり蔬のかり居を終り玩るな

いせ 道筑

一やと祈る名流もあゆめゆへぬゆへぬの浦蓋

百さう讀らる中よ音成

源高川

山水のうらむ岩根のさうりなつてふ常もあるゆへぬ

幸隆

陰好く生流りぬかりあゆむゆへぬゆへぬのれ行

たのむ行

佳春の松

竹のうきゆへにせよ後むくの空のゆれ

心離竹 源高彦

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

松 よみ人志

とよを木の影に縁のまゆの松のふゆをよみ人志

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

松積年

源高彦

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

海を松 田安女房  
えき村氏母

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

磯を松 夏原安

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

洞窟古松

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

あつらふよ生われし竹のふろのこの籬の根よりわき

道陰の秋もさうや岩よの松よりあまの山風のそよ  
まふけし林の木の葉のさけとすくもや陰あまの  
林も

おのちの秋よりれとや陰あまの松の林よりあまの

青河

青河

陰あまの松の林の木の葉のさけとすくもや陰あまの

青河

雲うる片山林むらさき乃ちさうりくもあまの

晴文鶉

佐孝

あけその一羽代のまゝま庭のきつとたぐめあまの

鶉のふれ

源正

あけその一羽代のまゝま庭のきつとたぐめあまの

を村鶉

源正

うま雲の立田乃山を明とて林の里まのこゝるま音

馬

源正

あけその一羽代のまゝま庭のきつとたぐめあまの

馬

源正

あけその一羽代のまゝま庭のきつとたぐめあまの

源志げ院

とらうのまうしめい

鳥枕雑とりの集伝

おまへ人せきたる花のま初よあまふ胡蝶のま友乃枕を

美化言志書

昔かおりのあゆやうるうん強さくけき

脚書

海原や雲井よほく浪のうふ合とあつ仲つ境のあ

白正正別

便のまはけのねとれとあく夕日のこる仲の物あ

源を流

海山乃こもやかまかまのえ海原をく夕日たたり

止静ん院殿 為村卿 年忘よ産通亭あま

湖能を

源萬彦

花日乃新もあまのあまのゆりまねる花のう浪

山情

かき花の末を返る山原も夕まひくゆり日乃新



月希能全... 一人を以て

一まきのみのみも流るるまはるる治政をるるまはるる月歌

ある人のまはるる宰相をるるまはるるのまはるる

歌を以て 秀明

山中の指を以て 浮きあはるるまはるるのまはるる

迷懐 是れ書出書

をぬれをまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

何事もまはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

河原を以てまはるるの御代のまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

まはるるまはるるまはるるまはるるまはるる

おひなの入るおの申よ 遠江も彦通

佐山松のめい成おまごけくをのさうもくもさうのま

あらんえ松のくめふと信と八雲おありあり

いづれ一くさうらもよりく松のくめふと

も松のめいふとあり

彦通のめいふと

お松のめい

あまねもつりあつしおまごけくかきと年ををらん

鶴血海を流り

源繩也

あつし乃ちおれよりおまごけくかきと年ををらん

宝曆五年 為村の再志百首乃り

述懐

をいも彦通

おもえと君と親とみ未そく仕らんあまををらん

ある人よけふ為村の書伝み忠孝可有お感

らと何り彦通のめいふと

申せ成をやうせり母七十九年か彦通り

六十あまもまごありぬ彦通を六十年余

齡八十あまもりてはく信と為村の書伝と

信伝といふ實政十年の秋あり

源氏物語の巻名

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

信理

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

信理

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

信理

あつちのついであつちのついであつちのついであつちのついで

冷泉ありの源流りく述懐

遠江も彦通

ついでに源のそとつり乃浦よよををいふ風たは

述懐のついでの中よ  
よみ人志す

千代をけく景人つる浦浪よよまをのつりし物とをゆれ

あゝ人志すいふしつるそのおい

甲斐も彦通

君う代とよのつりし流人の物よハワれもかきう景

拾瑞 山岩村  
寛政十一年九月

君と親のありきめを九千者もせよあゝかきう景

を述懐  
よみ人志す

かきうのきとあらあてうまひよけらんがよとを述懐

あゝ人志すいふしつるそのおい

劉燕の秋名よ九千代彦通とつりし皮よ班彦つりし

傳をよまよハ十のきよ志りぬ

彦通も彦通

あゝ人志すいふしつるそのおい

あゝ人志すいふしつるそのおい

山吹集よんものよひよりあはる

獨述懐

源三門

そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ  
そよみのつねあゝそよみのつねあゝ

丹波宮政武

そよみのつねあゝそよみのつねあゝ

寛政八年山吹集百首の中、独述懐

伴漢書

かきつれん早ゆすなはあ集のそよみのつねあゝ

これに柱形

さよほも産通

後もしきつねあゝそよみのつねあゝ

源田社述懐

源三門

ありしそよみのつねあゝそよみのつねあゝ

号名新述懐

源三門

源田社述懐

号名新述懐

源三門

かけぬるひもふれまひのそよりのうらみも  
あへて遠慮

世とは程なき月とて度尾の煙も下りてあつたやうに  
幸境

星もまた深々と朱も空もあひうらみ神乃さくま  
年知清

人もそくを我にをわめとてかき世をくちを  
左江守彦通

言の葉もねむるあまの白もとめつる情はうらみ  
柱取一人

をり子にのりて雲の葉が空をを成あふもあまの  
中將兼村相良のそよと成るそよ

いさよのあまの言橋よりぬもあまの  
四位保光朝臣

いさよのあまの言橋よりぬもあまの  
中將兼村相良のそよと成るそよ

いさよのあまの言橋よりぬもあまの  
中將兼村相良のそよと成るそよ

るけのほりうりくのかいを 作成しけりく

遠江書房通

武門やうりうりのふぶく世代の光成るけり

物元年中為相判の交合新字

冷泉あまのりしり時

家園法師

泉川あよきを今も程流く代りよのそあ云の集

増檢後保己都みきぬもあめり

着書のうら何れうつらありよあ

遠江書房通

忠をむとあしとさたをまや人ははりまのそあ

あ飛書中表百そまよみく尺を信り

とるくを集とくあまういあひうてま

奥子書守信し 源言門

そ今のまきさる花の上よりあわたりまあ

くく 免飛書中表

花あめいも今もあまひぬまあけりまあ

むり通の書信のうら今もあまひぬまあ

何れにあらんやせ侍りまゝに  
久草に

忠篤

相とあらんやせ侍りまゝに  
懐舊

忠篤

うき時とてまゝに父侍りまゝに  
明子とてまゝに父侍りまゝに

忠篤

父の侍りまゝに父侍りまゝに  
父の侍りまゝに父侍りまゝに

義山

父の侍りまゝに父侍りまゝに  
懐旧

源吉

父の侍りまゝに父侍りまゝに  
懐旧

忠篤

父の侍りまゝに父侍りまゝに  
懐旧

源吉

父の侍りまゝに父侍りまゝに  
懐旧

源吉



いづれを為材にせよとて老くあり画像自筆  
自書に流すむ形をいふのあかしあり  
りり能志の年月と為りし成りしを福言し  
お解く歌ありあり 伴賢谷

秋のあき月かむりしとありしをよそその可き所  
名新橋田とて事成を中將九百奉と  
遠くも彦圃とてかく決行ふあり

あみまくりのち京ありし時をいふ事の上  
あみまくりのち京ありし時をいふ事の上

あみまくりのち京ありし時をいふ事の上  
あみまくりのち京ありし時をいふ事の上  
あみまくりのち京ありし時をいふ事の上

あみまくりのち京ありし時をいふ事の上  
あみまくりのち京ありし時をいふ事の上  
あみまくりのち京ありし時をいふ事の上

あみまくりのち京ありし時をいふ事の上  
あみまくりのち京ありし時をいふ事の上  
あみまくりのち京ありし時をいふ事の上

人の心もあつたか  
たのしき人

七年の昔りもあつたか  
ふたふたなり  
まの葉乃ち

歌  
歌  
貞淵子 柳原

時のふまを  
ふたふたの先は  
ゆる人の世の中

足徳やとせ  
あつたか  
あつたか  
あつたか

夏  
伴賢吾

ふたふたの  
あつたか  
あつたか  
あつたか

甲  
甲

五松の  
あつたか  
あつたか  
あつたか

義  
義

え  
あつたか  
あつたか  
あつたか

平  
平知清

あ  
あつたか  
あつたか  
あつたか

あ  
あ

あ  
あつたか  
あつたか  
あつたか

あ  
あ

あ  
あつたか  
あつたか  
あつたか

あ  
あ

あ  
あつたか  
あつたか  
あつたか

阿波逐良

今よりの我のゆく来身故あく死ぬ言ふ若くやたのむ

か

其作書止る

望く程久く丸赤禰をたのむ静りあふ言ふ事たのむ

樵師日書

かよはれもや萩の体ひよおひしりも今止る

樵師返

うら志事とふ山返のぬきまはり夕日よき事し萩の麻も

松女

遠くはる廣瀬

思ひきぬ人よ梅枝のこし霞の月ようともやおのうらめし

片所傀儡

早孝盛

川せいのきよはれいみよる浪の枝さぬ髪もやうらめ

上陽人

片所

祈もあぐ我の六十乃甚を流ぬ言とおもひ交乃うらめし

深き門

梁もけぬ燕の移さぬわささうらりあやうらめ

陵園景

松の門一きひこらくぬの日よあししのきけあやうらめ

揚貴地 遠江屋通

母の月のその杯しるまゝの頃の候よりこそ世をさすは

享老後人

よろこびしうきとえ事敵一昔の人よよもせはあはれん

歌きん

夢飛も世を

うらまの身よありともいふ程を帝のかり屋のつりの世を

坂やうりく人の入るこまてそとそと衆の人よ

よそはさる〜ら

兜新法師

直之助の心をあかしし原のよき〜しむ心ゆゑは

家のやけ侍。美

釣月法師

智くまもいもゆゑも好いまるまゝのいかりのそとを

歌きん

夢飛も世を

河つゝの里の候も幸なりぬ水成たのむんを

雑多

甲斐守の正統

あめさきいづくの山も美代をよりふおむけの海や

松有歌多

正統

たのむ宿のあめさきいづくの山も美代をよりふおむけの海や

人の八十賀 松遊年友

年知清

あ代の松も照へ百年ふたしをたぬぬの松  
松延齡友 源頼成

あ代の松も照へ百年ふたしをたぬぬの松  
あ代よふ松とよそへふしは  
をりのほまんとよまひを鶴のこを栄成たぬ

あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは

あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは

源隆成

あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは

源隆成

あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは

源隆成

あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは

源隆成

あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは  
あ代よふ松とよそへふしは

源隆成



旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

平知清

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

志げき

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

月並旅

正隆

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

夜旅

丹波守政成

旅よりゆく日と暮しゆく旅程を月とて所々  
とまりしに旅宿いとわひかりぬれ

享保六年八月廿二日の夜

十七日の夜

源守門





臨河友

一八三人友とす。乃る山列の臨河の友。其の  
形を以て

乃る此をまをかへて、七、臨河の友と枕をなす

蜀嶺

定衡書

雅子  
後室御尼

もるけしなをぬゆをま來りて、未遠きひらの七嶺

玉念尼

乃る此をまをかへて、七、臨河の友と枕をなす

蜀嶺湖

信理

臨河の友とす。乃る山列の臨河の友。其の

臨河雨

丹後書廣氏

かけの人の雲の雲より、雨の雨より、雨の雨より

臨河雨

源義光

舟出の人の風を吹かす、東午念の友乃る

臨河雨

源義光

舟出の人の風を吹かす、東午念の友乃る

明和二年九月、信理、玉念の城を以て

玉念といふ所より船出、臨河と定衡御尼

毎出する末もたるけし海京やいよのき根と記す

古渡雨

源志げ流

さぬいぬ雲りやる流衣袖乃りりよぬもりぬ

春流といふ事哉

も初らうと

甲ひおすれつても家つとよいうききき其の流人

流衣は流りくまや人のまよはるありとたり

ゆらゆらうやく友船まらゆる兼 浮流きき言

ゆらゆら船まらゆいゝ観のう此流の極いゝ神も流

おちやきとみくありふより長流の流はゆは

丹後と流氏を

流の流と流しゝ和の流もみ程ある星のをきゆた

行客舟已遠

又集る類

よも人たしき

漕出ゝ名流を舟の流と記乃ゆは流を流の

流乃うゝの中よ

久長羽長

流を何ききしと記しんかり流しきき流を流

哀傷祝

おちぬ事さる人の書いごりし世く之お母さの

なまらぬ心さるる 一歩知清

なまらぬ心さるるのめりこつてまはるやある書やうは

あゝあゝなまらぬ心さるる 一歩知清

清きさるる心さるる世の中の人をさるる事さるる集の書

あゝあゝなまらぬ心さるる 一歩知清

あゝあゝなまらぬ心さるる世の中の人をさるる事さるる集の書

その次の日はあつりぬ

寛政十一年六月十二日贈大相國から書きたる紙

七月のちをきよめ東御供つるまはりの

入り留りてく 遠江守彦爾

松陰のちりき屋とりやうり乃ち代乃ちあはれき

ゆりのとまきしき 源二

いかに強花をんく

くは昔北のちと古伝はくきとあはれき

三峰谷いあ ちり

人のちりきしはくきとあはれき

いかに強花をんく

くは昔北のちと古伝はくきとあはれき

いかに強花をんく

くは昔北のちと古伝はくきとあはれき

いかに強花をんく

くは昔北のちと古伝はくきとあはれき

をくねくも花よりあはれきとあはれき

いかに強花をんく 養他流女房

村志くれはははは 二福

なす 詠めんく

遠江守 彦通

かひらぬ昔致を母といふたひく風の志くまに神とて  
享保六年十月をけ流すまうりてこりぬたき  
行隠しよりそやうれり家ぬゆい

長作 甚良

おひやまほほる枝はれをさあるうひもね、ゆきを  
いらくもあつまりあ群のなまをいかにせりぬ  
しよき伝はぬ 源三郎

きのもまあ福もみねの陰今もまきまきたはし

そのはまの身はうりに家人のすうたあ  
ゆりにあつまりしよき 源三郎

いあまおらあしんはうは流しはうなりのあま  
あまなれり年々のあまはしん

きん

いさきぬあつけのころあま人のあしんあま  
よきとくあまあまの十あなりあまをいれ

きん 彦通

あつたのあまいあまはあまをいれりいこのた





是ハある人の其字をたり入るよあるなり

密傳ノ法成さく

か解く

あるなりたる成志を其法の師よりあるまた教導し  
何人ニ鑑み我業ニ教は法を所かくなり  
連平と志ある君おれ此多詔多をいあるなり  
余りい法修教なりといなりよもは我なりなり  
よもはるもや義は一傳あり彦通が水也控  
わらあるなるれよもは池ぬるなりやちはし花  
よもはるなり義心あり通はかくは言をうしむ

正入り方ありて系をせありといふ也彦通  
したくありやもはるなり修傳れよもはれはる  
以爲村々合矣磨洞のふくいりありやつぬ  
次のこといりりしとて義心系をせよも彦通  
の御針ありて強くはと古流り事し義心の方ハ  
点なり一宗匠の明鏡ありてなれた村々  
あはる思成ありよもありよもはれをせらる  
も人の字をり方ありなりよも人の一傳なりと  
教の所よもはるいり是なり



如是辨

方便語ニ

大和有利智

えりし程りの姿乃花紅紫何とくもあら番と人

也是縁

遠江吉原通

初くりのあつまをせりまの辨此便とほきさうくの糸

石見内衣裏

六百才子品

源志げ洗

衣よりりのいづくきり岩のたぬくとも法あた

龍女成佛

提婆四十二

幸隆

うき流よきらうくまうくわつじきり流し法をみり

隈大神カ

神カ品十一

板形

おろりや由法の危のあつまを奉とあつこの辨の力を

如日月之明能除諸迷真

お水

あつ人衣の月日と世に照る相をぬ法のあつと

無利不現身

普門品廿六

お水

補陀落や光をわけくすむ月のいふのよとあつり

必得是經

勸修書八

お水

あつまのにはりしよ白の光の枝をやあつあつをり

千葉蓮華卷上復隈千秋廻

梵經

源三門

多むるやちの蓮の花毎よりけてやまの月の影

定水沈清心除自飲

宗鏡録

お水

すむぬのきびんそそむるあふらのあらの産のふたは

不邪淫戒

佳春

はま初く人の情のうき海よりありともひきまぬえ

不飲酒戒

お水

人の上よりさしきりし竹の葉のうに受けきり碎のれを

養生要集十樂のうち引接結縁樂

權律師法住

あふらぬ教のたも乃結々結々を海よりさすむ

神祇教

神祇

平高潔

水子  
白鳥

みず流川上津岩根の石風やうごめ代ふは他ゆし

連河

おしたるもをさふんそ水海やはさあのゆあるきさつに

松運

せくたくをねちまをせぬ山玉うすの葉のたしうき

伊勢

大和寺利啓

天つしを光とくく代をともあつてなすてぬ伊勢のゆり垣

日光ありて百六十廻の邪念よ東叡山のまゝぬ

海へて洋をまじし付 遠江も彦通

ても百六十年よめらぬ日乃光法もくゆらうら

安んぬ年日光御社系供奉よ旅立ちの時

おんよりあゝ 御殿一人

指長袖をほろろ移りて来し及彦代よりく

石清水 洪海も出居

照るるの束もたのもろい清の溜りぬ世代にゆきゆき

八幡宮法系よ 源三門

たのしむわう人をしむ清の流れたる代も

賀茂 信長も上政

も旅人のまゝ墓のけしき縁もよまかぬ川あり

墓心 源ありあらし

今も世よ邪と君よのらうらひの墓やけりてまをぬ

平野 信理

秘傳の昔をうけて梅もさうや初めの春の夜

稲荷社法系 社法庵 源ありあらし

ともゆきあらしの玉板ありて曉らうし枝のも陰

春日社奉納の方の中よ 九中御寄村御信

たのしむ夜の未葉乃いりまて神のちをよかたは身ハ  
あはれ元文二年二月春日社目三信延庸らあま  
未葉まきいくあ代けく常あんわら御信乃松の  
春信とつあをまきね吹くまひくはあとり為村  
の御信とあらのくはうまいい徳よとのひりた  
あらのくはあまきぬ人ねりしあまきへやせあはるあ  
信中將くとのねいりあまのあまのあまのあまのあ  
あ文字よとまきくうの社よ延庸和初を御信乃

事流あまのりれとよ村御信未乃せまあま  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
りあらあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ

右徳院賜大相國のむきめ教よまひり流くま  
このあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
大納まら向のつるまよたら初まはあまのあまのあ  
まらあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあ  
大樹の作らまらあまのあまのあまのあまのあまのあ  
春日社り



天の御と行たまふに御成の別をうりし御一通り  
さへ西南の海よりきりば御成をうりし御一通り  
わに七月十日の別をうりし御成の別をうり  
まらぬ  
大將監志房

大と御の御成送れ日本乃御とせし乃あまの御成  
大の御成にありし御と志房の御成にありし御と  
かゝる御成御成書に御成の御成にありし御と  
の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
云の御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と

いあし〜〜人の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と

百首の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と  
御成の御成にありし御と御成の御成にありし御と

張神

佳春

恒春の節乃たまけと祈るるよきものありしに愛しむら

毎月十日恒春節日の彦通のしるしありて

とけの中よ 名所ね 伴賢治

木の石よりち木の片をきりてて照るるなり此恒春ね

日記 正容

はめりててててててててててててててててててて

梅宮 滝屋上人

名も昔も昔の梅乃とやうにぬきやゆきある

神園 遠江彦通

かこつて今もいかにぬきの葉の程よくその節の園生

初春の事多い信は天満文を納

秋節神 源高門

節をやはらげしとてくにをきりて秋のこの葉

おれ一紙 源繩也

節をいふ代しとせし白菊のむなすまつるはちん

神神 遠江彦通

此の葉乃葉とまゝあるとてねとあまのちと源し

春神神祝 平知清

瑞籙やいふ代の卯乃るるまゝとて本年の初め茶  
伊豆の三浦の卯乃清く日本熱帯島大山純  
大明卯と頼も侍るをん

口位定静朝臣

かきもかきけりや日本とまゝもまた卯のめを  
園列伊達歌浪山の流も酒務社を納  
人のより侍る中

神祇

源義光

紫のぬき茶のぬきもきりみちのわくあるまゝの

神祇

山城尚綱

昔今傳く終ぬしものそ乃乃のむくりのむしはを  
人麿社に海して

史記法

とて人よとて言乃茶のあまを卯のめを  
京保ハ奉二月柳本社卯信室下あり三月  
酒務清光も人麿社に花梨列春といつ  
るも人よとて侍る

史記法

いまハ岩保も玉垣りをあるより代ちきりさき  
貫之靈社を納為村の史記



松石政色

夏原安仁

色之ぬらふの故乃ちとつえやまらこく其のよの葉

張禮

源重國

すねるをらんやかうも今も張張代のやまの葉

新歌

遠江中原彦通

氏人の物とたのめをまはまよくおる事し新張の松まはけ

つらねもあうのやうは行事もあうらんぬがもせ

きん 平野縣社々中原氏の張へのは極あり

社政祝

源重國

柳葉の陰よいく代り霜雪成いさきしるのよはば

侍従信成相模 松平 彦吉

張張まけくく久きくしめ縄をよよねるまきなるん

社政祝言

よし人たる身

よあつ代とみ世のやうかけまがしき君を祀る

神代

新歌

雜紳

後叙

享保十五年八月冷泉家よりむき〜  
い〜道のつぎ〜け〜く〜は〜う〜に〜流〜る〜ぬ〜く〜  
か〜り〜ま〜く〜ま〜ひ〜き

省二

志〜一〜道の道〜な〜く〜ま〜は〜の代〜も〜ぬ〜く〜ぬ〜  
家〜乃〜あ〜れ〜し〜ら〜ん〜時〜と〜あ〜れ〜く〜く〜竹〜の〜み〜い〜成〜  
か〜ぬ〜れ〜し〜と〜あ〜る〜者〜は〜は〜り〜ぬ〜る〜年〜六〜十〜乃〜  
杜〜成〜ぬ〜く〜こ〜い〜然〜れ〜乃〜久〜り〜け〜い〜の〜世〜あ〜る〜

つ〜ゆ〜せぬ 名〜姓〜を〜り〜成 子〜は〜と〜く〜く 又〜ま〜ら〜く〜程  
あ〜り〜乃〜ち〜乃 各〜里〜に〜成 書〜お〜く〜る 君〜り〜と〜ま〜ら  
石〜張〜ふ〜り〜き ぬ〜く〜の〜社〜を い〜ま〜が〜く〜ま〜い ぬ〜く〜の〜世〜あ〜る〜  
む〜き〜の〜秋〜よ〜と〜れ〜く〜く〜り〜ま〜て〜程〜に〜都〜の〜は〜れ〜ぬ〜  
延享二年十月十八日 冷泉家より入川〜  
傳り〜ら〜ん〜ぬ〜ぬ〜二年十月十八日 冷泉家より入川〜  
入川の上〜ぬ〜ぬ〜ひ〜月〜も〜日〜した〜ら〜い〜ま〜と〜せ〜ひ〜て〜よ〜  
く〜ま〜く〜あ〜り〜る  
遠江の彦通  
言乃世に 涼〜い〜く〜 ぬ〜く〜 志〜ゆ〜り〜ぬ〜

松うきをり 陰もぬきぬ 若う門 入ぬるなり  
りりりり 介も子も 身乃 駢 延てまう  
年もその 之乃をうり 沖き月 十日の  
十うす やはきやうて はゆきもの ながみ 霜の  
むくく 垣 ふれこ書も 生たり 小松もみ  
ゆす東の めくもさうく くらきん 泉のぬき  
たのりり ぞれたはるを あさうぬ えみおれを  
うううう ながうりも をうりも 何一月星  
ゆうう年 やうう年し 之をうり 申文たう

村去りき 居候の月乃 待つけり たるの取次  
きま(あけぬ)

若う門 年ぬちまうたのぬき 身の候も 月日

六句のう

意

遠江守 彦通

あううう 月日 移りゆく みるて 別ては けい  
折句のう  
人の心を かくしめ

きくは 取つる 事と 白の けい けい

源三門

きていよを ぬき 秋の ぬき

むちちを ぬき ぬき

あやえん

平知清

あめ香やよのほやめいりしねさうしね

あむやう

遠江書度通

夏のゆよむきあやもちさのちせぬなねやさけく

遠江國遠香のさくぬい情ありいさ

さうさあしらすあむさうりゆ室よあえぬく

さうさあしらすあむさうりゆ室よあえぬく

平知清

ま秋ふたしきまりあしゆり代さうりあやいほ

まきう花のへる麻さうりあむさうりのあま

まきう花のへる麻さうりあむさうりのあま

まきう花のへる麻さうりあむさうりのあま

あな

あなりのさ湯

あなりのさ湯

あなりのさ湯

あなりのさ湯

あなりのさ湯

あなりのさ湯

あなりのさ湯

あなりのさ湯

ナシヨリ

遠江守彦通

ナシヨリ今を望めども猶吹も静りて海はうかす

地儀十坂沼野浦山滝津河道田

お取し人

ナシヨリのこゝろはなすまはるよりうらふまの木のこゝろ

木名十柳柳杞柎黄楊柎樗桐柚梨

よし

かきうらまゝおひいむまのけししあちまゝまゝまゝまゝまゝ

畧十琴瑟麻教ら矢籠流書海

遠江守彦通

おとひいひまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

回文

平報清

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

遠江守彦通

おとひいひまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

ナシヨリ

月よほく入森の床も松の葉にうつすも琴の糸はあけ  
伴資吉

ふりまへる雪と氷の川の冬に花をまき  
かへりよもみぢうらぬ

平知清

なるとみ沼と尾も名はたぬぬをひよももとつや  
遠江守彦通

友の事つのもむさういふはともものまやし  
あはれ

霞関集

全歌

八十一歳海書

墨附百六十二枚

外序三枚 萬葉書

蹄溪藏版

寛政十年

己未秋

震開集余親生大人石野自撰係手書大人  
世傳子有一精力衰頹故作字之肥瘦因得  
一懶於故書。歸命余授計全雜不肯已純  
大人之志乃刪定應命。遂從事于剞劂不  
日竣功。回為如是錄齊藏版云。

寬政己未孟秋

葛齊依之末

萬彥

